

早稲田大学教授の岡真理氏は現代アラブ文学の研究者で、パレスチナ問題に深く関わっておられる。昨年の10月に、京都大学と早稲田大学で講演された「パレスチナを知るための緊急講義」に加筆したものを収録し『ガザとは何か』というタイトルで上梓している。学者の論文は事柄を分析して、上から見た評論という印象で、何か物足りなさを感じる。岡氏は『ガザとは何か』で、パレスチナ人の立場に立って怒りと涙をもって、イスラエルの無法な暴力、メディアのご都合主義的な情報、パレスチナ問題に関して操作された忘却と無視の世界世論に、ご自分の言葉で真っ直ぐに語る迫力溢れる講演で、心を打たれた。

岡氏は四点を上げている。①現在、イスラエルが行っていることはジェノサイド（大量殺戮）である。ヨルダン川西岸のパレスチナ自治区においても、植民地化を進める強権政策で入植し、多くの犠牲者を出している。ガザにおいては、フェンスに仕切られた「天井のない監獄」で、生活物資は全く届いて来ない。食糧、医療、環境の悪化の中、陸と海と空からミサイルと砲弾は止むことなく飛んでくる。岡氏の実態報告は、まさにジェノサイドそのものである。

②今日的、中期的、長期的な歴史的な文脈を捨象した報道は、現在起きているジェノサイドに加担している。10月7日に、閉ざされたフェンスを乗り越え、イスラエルのキブツを襲った出来事以来、イスラエルとガザに関する報道は増えてはいるが、1948年の建国以来、イスラエルがパレスチナにどのように対して来たかについては殆ど報道されてこなかった。報道されても、「暴力の連鎖」「憎しみの連鎖」「どっちもどっち」の言葉で、他人事のように無関心であった。その姿勢こそがジェノサイドに加担している。

③イスラエルは入植者による植民地国家であり、パレスチナ人に対するアパルトヘイト国家（特定の人種を至上とする主義に基づく、人種差別を基盤とする国家）である。イスラエルは国家建設後、数え切れないほどの戦争犯罪、国際法違反、安保理決議違反を続けてきたが、国際社会はそれをきちんと裁いて来なかった。イスラエルがやっていることを不問に付すという伝統が国際社会に形成されていた。

④何十年にもわたる二重基準があり、それを私たちは許してきてしまっている。ジャスティス（公正さ）の基準は一つで、何人も等しく適応されなければならない。ところが、ロシアのウクライナ侵略に関し、米国にとって都合のいい場合は、国際法や人権が声高に主張され、メディアもキャンペーンを張るが、イスラエルが絡む、米国にとって都合の悪い場合には、国際法も人権も顧みない二重基準がまかり通っている。

証言を三つ紹介したい。京都在住の西岸地区出身のジョマーナ・ハリスさんの声。「イスラエルは法の上にあるわけではありません。そんなことはあってはなりません。イスラエルは75年間、止むことのない戦争犯罪を犯し続け、あらゆる人権を侵害してきたのです。イスラエルを法の上に立たせてはならない。残念ながら、世界の諸政府は、ファシストであり、極右で、ほとんどすべての国の政府がイスラエルを支持しています。残念ながら日本も、です。」ガザ中部出身のアンハール・アッライースさんの声。「もしかすると、私の妹は、負傷し、痛みとともに、助けを呼びながら、なんの手当も受けられずたった一人、地面に横たわっているかも知れません。壊れたわが家の下で誰かがまだ息をしているかもしれません。彼らは水と食料を見つけられるでしょうか、彼らは恐怖の叫びをあげているのでしょうか。」最後に岡氏自身の声。「恥知らずなのは、私自身です。だから今、話していて、とても苦しいです。教えてください。非暴力で訴えても世界が耳を貸さないのだとしたら、銃を取る以外に、ガザの人たちに他のどのような方法があったのでしょうか。」